

甲斐鶴寸の遺文

―「常磐井堤の記」を遺した歌人―

羽 紫 弘

(一) 梅をたづねて

いざや子らともにをゆかんことまくら

高ばた山のうめのはな見に

むつみ月中の六日、おもふ友どちのもとより高畑てふ里の梅の花見に行けるよし聞しければ、其人々のあとしたひつゝ植生のすまひなる家に立よりて、ふたりみたりして人はこずやと尋ねけるに、ゆきかふ人々の多ければしらずとなんいひければ、川べなる柳をたをりて、

立よりてたをればなびく青柳の
いとよりく／＼にたづねとはまし

高ばたてふさとのむめをめめて

なみならぬ花も匂ひもたかはたの

むめにはよきに春の山かぜ

まどろしてあかぬこゝろにすがのねの

永き春日をうめにくらしつ

(注) 原文の変体仮名を普通仮名になおし

且つ濁点、句読点を加えて読みやす

くした。写真①参照。

高畑は「たかばた」と読み、今は高皇の文字をあて佐伯市に属するが、日豊線上岡駅のちようと対岸に当り、昔は番匠川右岸の交通路に当っていたのでかなり繁栄していたようであるが、今は戸数僅かに十数戸の寒村である。然しよく見ると山すそや谷あいのかしこに梅が多く、先般佐伯史談会はここを探訪したが、今年は梅のつばみかに

ぎやかであるので、今頃はもう五分咲きをこえているであらう。

鶴寸の梅をたづねたこのころの高畑は、すぐ近くの大内や龍漢寺にまさる梅の名所として聞えていたらしい。

(二) 遺墨と小伝

甲斐鶴寸は佐伯藩家中の士、国文学に造詣が深かつた由で、壮年のころに大阪の藩邸に勤めたことと、その墓が養賢寺の境内墓地にある外、くわしい伝記が伝わっていない。その上鶴寸から三代後の甲斐家当主は、ずっと以前に佐伯を引き払い、只今は福岡県に御在任の模様である。

ところが幸いなことに、甲斐家が当地引揚げの際に家財道具を一括町の古道具屋に下下げた時、その中に前掲の「高畑梅見」の文章と共に、夥しい歌稿が交つて居り、それが好運にも当市平田幸市氏の手に入り、その拝借が叶うて私は昨年終りごろからかなり丹念にこれが読解を試みる事が出来た。

ところが流麗な和文で買かれていた鶴寸の字は、素養の浅い私などには読めない所が多く、徒らに日を重ねるのみと言つた状態、幸い親切に教えてくれた書道の先生のお陰で、このころになつてあらましま

とまつたので、とりあえず覚書風に書きつらねて、お日にかける次第である。

先ず「鶴藩略史」(増村隆也訳による)には次のように出ている。

「十一月十一日(天保十一年)徒士甲斐英貞が卒した。人となり善く書き和歌を歌つた。嘗て大阪に勤務していた時中山光実の詠歌の客と会つた時、山を以て題とした。英貞之に和して

暗き闇雲か雪かと問はぬ間に

梅と答えて 香う春風

と歌つた。光実歎称し別に歌二首を書き、禁中に捧げたと称す。」

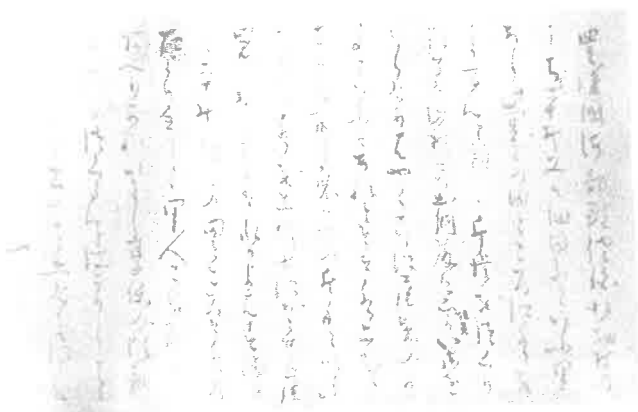
これは鶴寸の逸話とでも言うべきもの、佐伯藩の大阪蔵屋敷勤務のかたわら、然るべき師について国文学を学び、同好の士と和歌敷島の道にいそしんだのであらう。

(三)「ときは井堤の記」の梗概

佐伯市にそゞろ番匠川を遡ること約十二軒、本匠村笠掛の柳が瀬に横堰を設け、彌生町尾岩、平井、門田とつづく番匠川右岸を灌漑する



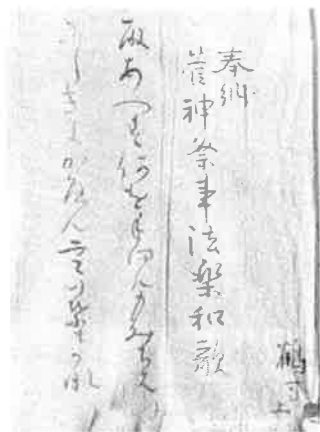
① 鶴寸の遺文「高畑の梅をたずねて」(52頁参照)



② 「ときは井堤の記」(54頁参照)



③ 「ときは井堤の記」絵巻物(54頁参照)



④ 菅神へ奉納和歌(60頁参照)



⑤ もよ子追悼の歌稿指導(62頁参照)



⑥ 姉七周忌追慕の手記(63頁参照)

常磐井路がある。これが文政元年（八一八）の夏、時の切畑村の大庄屋出納藤左衛門によつて指導開さくされた常磐井路である。その記念碑が尾岩の天満社の境内にあり、田原親興の撰になる漢文で不滅の文字として建てられている。ところがそれとは別に甲斐藩寸によつて和文で「ときは井堤の記」が絵巻物として編集され、その見事な筆蹟と共に夙に郷党に敬愛尊重されて有名である。（写真②③参照。）

以下少々長文で恐縮であるがその原文を掲げて、常磐井堤（ときわいで）の困難をきわめた水路開さく、工事の全貌を伝え、中島子玉をして「人々争ッテ里正ノ賢ナルヲ誦ス」と称えしめた、時の大庄屋出納藤左衛門の功績を紹介し（以上本文その一）、それから数年後に当る文政六年三月、歌人であり佐伯藩の家老職であつた関谷長熙以下大勢の同好の人々と打連れて、この井堤見を兼ねた一日の情遊をしたさまを記し、配するに三十六の和歌と二篇の漢詩をかかげ（以上本文その二）以て出納藤左衛門の乞ひに応じて贈つている。

原文は変体仮名を多く交え、古語を駆使してある上に濁点を用いてないのであるはだ読みづらい。そこでここでは現代向きに普通の仮名になおし濁点を加え、且つ句読点を施して親しみ易いものとして見た。

（四） ときは井堤の記

（本文その一）

豊後の国海部郡佐伯切畑村のうちに平井又は細田という里あり。此里わの田どころに水をまかせんと新に井堤をつくりたるは此村長出納藤左衛門位英がいさをなりけり。

はやくここに尾岩の井手といふはあれど、そは水上ほどもかき所に鬼がせの井手といふありて、水を上つせにおとせば尾岩の井手には水かよはず成りて、平井細田の田どころは水のたより乏しく里人こを歎きあへり。かれいにし享保の頃新井堤をつくらんとはかりしことありしかど、公のことしげきにまぎれて其ことやみたりしを、文化十三年位英さらに此事思ひたちてまをし文奉りたれば、其ことわりをきこしめしただされて、則しろがねそこばくをぞかしあたへ給ひける。

やがて其年ふみ月ばかりにひはりして日々に多くのよぼろをあつめ、くるしみつとめて終に此井手をなんつくりをへたりける。

其水口は中野村の柳瀬といふ処になん有ける。そこより山をめぐらし溝をひらきて水をとほし、天神社といふ処にいたるまで十七丁ばかり有けり。其程大かたはごごしき岩は、あるは木だちしげくて人のちから及ぶべうもあらざりき。呉座石といふ処はことに大きないはがねにて、こを砕かんには「つち」「のみ」もたへがたければ、ひねもすたゝらして炭火をおこし、あるは薪を多く夜もすがらこをしもたきて

石をやきて後に鎚もてうちけるに、唯ひとときばかり砕け散りて後はほ

まり

甲斐鶴寸しるす

五八

ること日をかさね月をわたりて漸に溝をひらき穴をとほし、或は石を
たゞみあるは土を積などしておこたらず、あまたの人どもをゐてこゝ
ろをつくしつるいたつきいふばかりなし。さればかたはらより思ひは
かりしよりもすみやかに、又の年五月ばかりになしはてたり。さるを
おなじ年の七月ついたちばかり、雨風はげく山の木ともほと／＼た
をるべう吹しをり、谷水さくなだりにおちたぎりて、此井堤も水底に
なりにたれば堤もそこゝくづれ溝もうづもれて、年月のいたつき時
のまに空しくほろびたるを、たゞなきになきぬべきさま也。ここには
じめより此ことにあづかりてよく見てよくしれる泉令藤原惟正、源親
興さらに又仰て志を上げまし、多くのみたみどもをえだたせ、埋れた
るをほりかへし畝たるを補ひて終に又もとの如くになしはてたり。

関谷長瀬
つきせじのこゝろも深く掘いでし
岩井の水や 世々にながれむ

甲斐鶴寸

千五百秋かけてたのみやまさるらん
常磐の井手の すえの里人

(五) ときは井堤の記

(本文 その二)

此井手の水の絶ることなかめりといはひたゞへて、常磐井堤となん名
づけたる。初よりつかひたる御民の数三万五百六十余人也。此ことに
あづかりてつとめたる人らは其名親興石ふみにゑりてたてたり。いと
もいともいそしきわざ也けりとおもふまゝに、文政六年やよひはつか

彌生はつかばかり人々と共に切畑の里の井堤見に行けり。げにいと
清ながるゝ水に沿いて、藤の花山吹などいとなつかしう咲みだれたる
風情えもいはず。千とせもここにゐて水のすみわたらんとおぼえたり

まちよろこべる人々よろづてうしきたりてあるじするに、皆人うちとけて菅の根の永春日共おぼえず。岩間行水にうかべては汲かはす盃の数々を添へ、いはほの上の苔をはらひてはつま琴かきならすなど、おのがじゝなる遊に、日もやう／＼くれなんとす。抑けふ爰にあどもひつれし人々、道すがらの言ぐさをはじめ、常磐にたへぬ井手の水にちいを代の秋の契り、松がえにかゝれる藤浪のゆかりに行春の名残をかこち、妻よぶ蛙をあはれみては山ぶきの花の露をそへ、谷川のながれには波のしがらみをかけまほしくおもふなど、人々の心々にうち出たるを、此里の長位英がしひてこふを、はづかしのもりては人のきかんも物わらはれならんとは思ふものから、門田の穂置いなみかねてみだりにかきつらねしも、さすが後のおもひではならんかし。

甲 斐 鶴 寸

ながれ出る若葉を見れば川上の

里とほからぬ程ぞ知るる

切畑のさとにいたりけるに、その神主の斯宜のよめにやあらん、かたへの松のしづえに結び付てかくなん。

立いでゝ人まつかげの手づさみに

ゆふとりしてゝこらへつるかな

田 原 親 興

代々経共たへじとぞ思ふ梁瀬川

いわきりとほす水の流れば

苞 邦

千早振神の恵にまかせつゝ

常磐堅石に水はたへせじ

これは新井手に水はのめの神を齋ひまつりたればよみて奉る也。

も よ 子

賤男の心にまかす常磐井の

すえゆたかなるさとの苗代

今 井 千 復

つぼすみれつみつゝけふは暮ぬとも

雲雀の床に 宿はからまし

すみれ咲く野をなつかしみ宿る可

安 足

草のいほりは誰むすびけむ

つらしともいはぬ色なる山吹を

思ひくまなく吹く嵐かな

古 田 重 彦

鳴とむるちからもなしや谷川の

松 下 林

はるの川瀬にすだく蛙は

松かげにかきならしたるつまごとの

下樋にかよふ 水のおとかな

親 興

若草のなびく大野に妻こひて

鶴 寸

きゝすしはなく 春の夕ぐれ

山ぶきの花のあたりに聲たへず

かわづ妻よぶ 春の夕ぐれ

古 川 知 可 子

やなせ河ちりて流るゝ花見れば

瀧 藤 久

春のみなとぞ 恋しかりける

山かぜにちりみだれつゝ谷川に

ながれてうかぶ 花の白雪

山吹のこたえぬ色もうらみつゝ

井手の蛙のねにはなくらん

橋 迫 斯 宣

世を捨てし此山住もくれて行

はるの別のうきやしるらん

もよ子

はる風のさをふまにまに谷川の

水かさまされる花のしら波

しと子

吹風にちりてうかべる山ざくら

つれなき水の又さそふなり

大島須磨子

おもふどち遊びくらしで鶯に

花の宿かる 春のゆふぐれ

今泉道俊

せき入れて盡ぬときはの井手水は

いつもちとせの音聞ゆなり

ちりつもる花の匂ひのふかければ

浅瀬もわかぬ 谷川の水

今泉都留子

時しらぬ松のみどりに藤なみは

かゝりて千世の春をしむらん

泥谷憲

谷河の水のまに／＼ながれいでて

み山の春を花ぞ見せける

さくら咲此山かげはのどかなる

春日ながらに 雪ぞ降りける

元節

緑楊條下坐斜陽 長嘯弹琴勸玉觴

澗水漂花流不盡 深山宮是舞山香

大島周親

谷川の水のながれにつま琴を

かきあはせつゝ昔をぞ思ふ

芳 臣

つれなく暮行春に咲藤の

花の名残をかけてたのまん

鶴 寸

ことのをの長さしらべに谷川の

岩こそ波もおとかはすらん

斯 宣

打わびて今はとかへる夕暮の

くも井にきゆる春の雁がね

春ならで人にとはれぬ山里は

けふのをしさも世にまさりけり

古 田 正 淑

沿岸崇山溝巧穿

源従鬼瀬百尋淵

不愁早賊太為虐

一道清流遍稻田

萬夫辛苦不呼天

疏鑿^カ巖^カ鐵^カ様^カ堅

要識效中豊歳象 新秩餘潤翠無邊

児 玉 勝 臣

底清み千世にやすまんさゞれ石の

数さえ見ゆる 井堤の玉水

市 野 瀬 幸 生

よゝをへて絶せぬ水の末遠く

常磐の井手の名にや流れん

あすはきりはた村ときは井手のあたりに遊び及ぶと、日暮ゆく春の空のけしきそこはかとなくあはれふかかるべきに、残すなき鶯の声さへいとなつかしく、あるは岩ほにかゝる藤なみきしの山吹いまもかも咲匂ふらんと、さこそおかしと御らんじたまはば、おかしき御ことの葉もあらんをつとにきかせ及ばんことをまぢ聞へ待たなん。扱此御ありきのことつるがもとよりおどろかしたりければ、御しりへにまつるひつかまはしく思ふ有つれど、ながきいたつきのなごりに、猶道のほども何とやらん、心もとなくえしもおもひたゞずなん。さすがかづにもれなんはいとくちをしう思ふこゝろのまゝを、例のつたなき

くちつきに物しつるもやさしき物から

真 佐 可

苗代にときはの井堤の水引いて

ちまちの小田にしげる民くさ

ながれ行あとより花のちりうきて

春を争ふ 谷川の

信 清

めもはるの田毎に分て行水は

常磐の井堤の千代の数かも

この「ときは井堤の記」の原本は、現在は彌生町切畑地区に属する

常磐井路水利組合が所蔵し保管している。それを彌生町の医師 益田
学氏が丹念に採録読解したものによつて掲げたものである。

さてこのようにして成つた常磐井路は、その後今日まで百五十年の
間に於て、取入口横堰の改修、水路の改良延長等、出納藤左衛門の後
をうけて營々と怠ることなく、然も報恩反始その功績をたたえて児孫

に語り伝え、毎年八朔（陰歴八月一日）には尾岩なる天神社で盛んな
水神祭を営み、水路脇の巨巖の上にある藤左衛門の供養塔では敵衆に
供養が行われて変ることがないという。

凡てまことに素晴らしいことである。

(六) 菅神へ奉納の和歌

甲斐鶴寸の夥しい遺墨の中で、先づ見のがせないものは写真④の和
歌である。

奉納 鶴 寸 上

菅神祭事法楽和歌

取あへず何を手向んもみちばの

にしきにかへん言の葉もがな

菅神はすなわち菅公を祀る天満社である。その天満社のお祭に際し
て奉納した法楽の和歌である。一読して私たちの念頭にはすぐに小倉
百人一首の中にある菅家、即ち菅原道真公の歌がうかぶ。

このたびはぬさもとりあへず手向山

紅葉のにしき 神のまにまに

(七) 秋はぎ

六四

この歌は昌泰元年（八九八年）十月、宇多上皇の吉野御幸に供しての途中、手向山の全山をおおう美しい紅葉を見て、ぬさ（幣）のかわりにさゝげようと読んだものと伝えられ、古今集に載っている歌である。鶴寸はこの道真公の歌をよりどころにして、錦にまさる言の葉もがたと詠みあげて法衆の和歌とし、道真公を祀る天満社にささげたのであつた。

このことについては前に掲げた「ときは井堤の記」にあるように、お城下佐伯から初夏の一日ここに井堤見を訪れて、「此里の長位英がしひてこふを……いなみかねて」その依頼を絵巻風の「ときは井堤の記」としてなしとげ、携えて再び訪ねて来て見れば、天満社の社頭そう、そうと流れる常磐の井堤水、豊稔を祝う社殿にあふれる村人たちに、大庄屋は鶴寸の編集になる絵巻物を被露したことであろうし、鶴寸また興の趣くまゝにこの法衆の和歌を奉納したのではあるまいか。

この管神は尾岩の天満社であり、その豊年祭に鶴寸が「ときは井堤の記」を携えての招待であつたと断じて見たいのである。

甲斐鶴寸はその書屋を松酒舎と名づけて、多くのお弟子を教えたという。そのことを物語るに次のようなのがある。たつきは師匠鶴寸である。

は月こゝぬかの日松の屋にて

もよ子

きて見れば庭の秋はぎうちとけて

花のゑまひもかはらざりけり

返し

とはるるもやさしかりけり野分して

あれたるやどの庭の秋はぎ

つる子

かはらずもなれし昔の心にて

露も情もふかき秋はぎ

返し

匂ひなき庭の秋はぎそれながら

もとの心をわれわすれめや

月 も よ 子

またいつかともにかたらん秋の夜の

月やたのまん めぐりあふまで

た つ き

かへりきて又いつかはと思ひこし

わがやどに見る 秋の夜の月

むし も よ 子

へだつとも思ひ出てよ草の戸の

露にやしなふ まつ虫の声

た つ き

露ふかきよもこのもにまつ虫の

なくねかひある今宵なりけり

もよ子、つる子は鶴寸の愛弟子であり、前掲の「ときは井堤の記」にもよい歌がのつている。その愛弟子もよ子、病氣養生の甲斐なく亡くなつたので、鶴寸は次のような手紙を弟子の一人——それが誰であるかはわからないが——に送つて、もよ子追悼の歌稿の指導をしている。(写真⑤参照)

こめやもよ子なが／＼びようきのところ
ようぜうかなひがたく、二月十九日身ま
かり候よし、のこりおほき事に候。びよ
うちう見まひにまいり候や、さぞ／＼ざ
んねんの事に候。

ついでんのうたしごくよろしく候まま、
たんざくにしたためつかわし申すべく、

ともに見し月と花とにことのはの

残るあはれをいつかわすれん

といたさるべく、のこるなごりといひて
はのこるといふことかさなりていかゞな

り。なごりとはなみのこると書き候ゆゑ、
のこるといふことかきなり候なり。

七とせの跡とけふも草枕

たびにしひと袖ぬらしつゝ

愛弟子もよ子の死をかなしみ、切々の情をのべながらも、弟子の歌稿に対し懇切に行き届いた指導をしている。愛情あふるる人間鶴寸、「のこるなごり」を「のこるあはれ」と教える歌人を、我々は尊敬しなければならぬ。

(八) 七周忌

次にかかげるのは難波の地に在つた鶴寸が、逝ける姉の七周忌に追慕の念を切々と綴つた涙の手記である。鶴寸を知る最上の資料である。文章また見事である。(写真⑥参照。)

姉君身まからせ玉ふときゝは、いにし

文政七年長月のことなりけり。いつしか

ことし八月の末の九日、七とせの忌日と

いふ日に成りけるに、おのれ又難波のい

たちにありて、〔注〕「私たちの義不明、或は稗説か。」

いにし文政七年の春、あづまへ旅だちせんとする際、ときあらひきぬ物しまひけるが、猶それながら残りたるをかたみとなるもいとなつかしうて、常はこのそこに、おさめ置たりけるを、けふ七年の忌日なればとてとり出しつゝ、

たちぬひし君はいまさで猶こゝに

残る衣を見るがかなしき

鶴寸の書は見事である。「仮名の古典をしっかりと身につけている」と或る人は評する。古典を全く自分のものにして、流るゝが如く、漢字と仮名の調和よくとゝのい、全く一つにとけて墨つぎも墨色もまことに立派である。これは私の素人評、

めくら蛇におじずのたとえの通り恐入る
けれ共、お許し願いたい。

この姉についても何もわかつていない
が、第二の歌では鶴寸の大坂への旅立ち
に際し、その着物の仕立替などしてくれ
た優しかつた姉、その姉の手になる品を
今はかたみとして追慕の念をのべている
のである。いささか文意わかりかねる点
もあるが――

(九) 鶴寸の墓

甲斐鶴寸の墓は藩主毛利家の菩提寺である養賢寺の、位牌堂の斜う
しろ程遠からぬところにある。それは高さが一米にも足りないほど小
さく、まことに質素なもので、正面に

友松軒天外鶴寸居士
寶臺智鏡禪定尼
晩 芳 童 女

と御夫妻と夭折した娘さん戒名が書かれ、向つて右側に「天保十一癸

卯十一月十一日」と鶴寸の死歿の年月日、左側には「安政二年乙卯正月廿一日」「同年九月廿三日」とあるきりで、俗名もなければ肝心の行年何歳も書いてない。従つて鶴寸がいつ生まれ何歳でなくなつたかさっぱりわからない。お寺の過去帳をしらべるか福岡県在住という甲斐家におたずねするか、後日に残す外はない。

それにしても鶴寸逝いて既に百二十数年、「ときは井堤の記」が有名であり、二三の人が鶴寸の短冊などを愛蔵しているのと、「鶴藩略史」や「佐伯郷土史」の中にはんの数行づゝ逸話がのつている外は殆んどかえり見るものもなく、養賢寺の墓地にある墓も苔むして詣でる人もなく、鶴寸の事蹟は全く忘れ去られようとしている。

このような時に幸いにも二十数葉に及ぶ鶴寸の歌稿遺文が出て来て
その中の優れた数篇を抜き出して「ときは井堤の記」と共に、覚え書
としてまとめて見た。いささか杜撰な点や、鶴寸その人についての追
究不足も否みたいが、私は今回のこれだけのとりまどめを足場にして
今後甲斐鶴寸の文学を更にしらべて見たいと思つている。

いざれにしても甲斐鶴寸は橋迫春軒とともに、佐伯藩国文学者の双
壁であつたと言えよう。(終) (佐伯市稲垣電護寺)